

研究ノート

中国近代思想研究覚書

「思想連鎖」と「空間」論的転回

愛知県立大学外国語学部中国学科教授
川尻 文彦

「空間アジア」の「思想連鎖」

私はこれまで中国近代思想研究というものを志した30年近く前から中国近代の思想家たちの残した著作を読んできた。その当時からいわゆる著名思想家たちの著作に日本の思想家や書籍の影響が多いことに気がついてきた。例えば、岩波文庫に入っている章炳麟の著作集（『章炳麟集——清末の民族革命思想』西順蔵・近藤邦康編訳、岩波書店、1990年）を見ると、その本文に多くの明治日本の書籍があがっている。その分野は哲学、宗教学、社会学、政治学等多岐にわたる。訳者の調査によってそれらの正確な著者名や書名が注に記されている。章炳麟がそれらの日本語書籍を参照して自らの著作活動をしていたことははっきりと見て取れる。しかし、それらの書籍は今日の日から見れば、学問的に参照する価値のない「古い研究」に過ぎず、当時の私は気にも留めなかった。じっさい明治時代の学者の西洋哲学研究を参考にして、西洋哲学書を読もうとする今日の学生はいないはずである。これらは今日の西洋哲学研究の水準から見てもとても読むにたえない代物である。いわば図書館の中で存在を忘れられた「遺物」である。

ところが1990年代に明治法制官僚の研究で知られた法制史家の山室信一が日本近代思想研究の中で「思想連鎖」「知の回廊」の視点をあらたに提示し、そのような明治時代の日本語書籍が「空間アジア」で如何に流通したのかを豊富な実証例をともなって検証しはじめていた。正直に言えば、それらの仕事に私は気がつかなかった。しかし、2000年を前後する時期に、私は中国研究の領域でのいくつかの潮流を目にすることになる。例えば、清末の教育視察使が訪日し参照した日本の教育制度や学問に関する研究（在日留学生史研究も含む）。あるいは梁啓超が明治日本で何を学んだのか、彼の著述活動の背景を明治日本の学問から探るような研究（鄭匡民『梁啓超啓蒙的東学背景』2003年）が登場した。梁啓超の「東学」についてもポツリポツリと研究成果が出始めた。いうまでもないが「東学」は「西学」（西

洋の学問）に対して言われる言葉で、日本における「西学」のことである。これらの研究の中には山室信一の研究に言及するものもあり、じつは私はこの時になって山室信一の「思想連鎖」「知の回廊」の研究やその提示する方法論にはじめて興味がわいてきたのである。山室の当初の主眼は、従来のマルクス主義史観、近代化論、あるいは国民国家的思想史に対する代案を提示することにあつた。その後、実証面での蓄積を重ねる中で、方法論的にも練りあげられ、『思想課題としてのアジア』（岩波書店）の出版とともに、いわば「方法としての空間アジア」を確立したとみられる。その「空間アジア」は「思想連鎖」による「知の回廊」が幾重にも重なりあっている。それは日本のみならず中国の近代のひとつの姿を示すものであつた。

その後、そのような日中間の「思想連鎖」を扱う研究が続々と登場した。著名中国知識人や文学者の在日経験、在日留学生たちの研究、あるいは近代日本漢語の研究等様々な分野の研究であつた。その背景には、デジタル化されたものを含め、日本の図書館で明治時代の書籍を閲覧することが容易になったこともあろう。

これらは山室の研究に「近似」する研究といえようが、実はこれらは「調べて終わり」的な傾向が強いのが特徴である。ただの種本探しに終始しているものも少なくない。「新事実」の発見という点で無意味な研究とはいえないものの、山室が方法論に対して強いこだわりを表明しているのとは対照的である。

国際的な思想史による空間論的転回

最近ふとしたきっかけから、私はデヴィッド・アーミティージの『思想のグローバル・ヒストリー——ホップズから独立宣言まで』（法政大学出版局）を手にとった。そこでアーミティージが、国際的な思想史（international intellectual history）、空間論的転回（spatial turn）を提唱していることに興味をもった。

アーミティージは政治思想、ブリテン史、アメリカ

史の研究者であり、クエンティン・スキナーらのケンブリッジ学派の系譜を継ぐ。スキナーが『思想史とは何か』（岩波書店）でコンテクスト主義の立場から「観念の連鎖」のラヴジョイを批判したことについてはよく知られているので、ここでは繰り返さない。異なるコンテクストで生じた概念をつなぎながら思想史叙述することへの警句である。例えば、同じく自由を標榜していたとしてもギリシア、ローマの自由、ブリテンの自由、インドの自由はそれぞれ異なる。それぞれのコンテクストを考慮に入れる必要がある。

アーミテイジはスキナーの思想史の方法論を継承している一方で、スキナーを厳しく批判している。アーミテイジの興味深い指摘は以下の通りである。スキナーらは政治思想研究で成果を挙げた。また彼らの政治思想研究が国民国家やナショナリズムについて厳しく批判していることで知られる。しかし、スキナーらが国民国家に対し批判的な観点をもっていながら、それがゆえに逆に国民国家的思想史を強化することにつながっているというパラドクスが存在している。アーミテイジによればスキナーらの思想史は国民国家的思想史の最たるものだというのである。スキナーらの政治思想研究は国民国家的思想史に固執していたため1990年代以降の盛んになったグローバル・ヒストリーの潮流に一貫して背を向ける傾向にあったとする。

そのようなスキナー批判を背景にしてアーミテイジは独自の方法論を提示し、いくつかの研究を生み出している。それは一言でいえば、国際的な思想史であり、空間論的転回というべきものである。アーミテイジは独立宣言、国際法、ホップズ、ジョン・ロック、エドモンド・バーク、ジェレミー・ベンサムらを取り上げ、その国際的な広がり視野に収めながら、分析を加えている。アーミテイジは思想史の分野におけるグローバル・ヒストリーを実践しているといえるだろう。と同時に欧米の学界で盛行しているグローバル・ヒストリーの限界を突破したいという野心をもっているであろう。

東洋と西洋は交わるのか

山室信一の研究に触れている私たちからすれば、アーミテイジの提言はじつは既視感が強い。一国史的な国民国家的思想史を打破し、国際的な思想の連鎖を重視する、また発展段階的な歴史観からは無縁であり、書物や思想のコンテクストを重視する点などは共通している。ただし、このような方法論的試みは、それが「成功」できているかどうか読者によって判断がゆだねられている。

アーミテイジは『万国公法』やアメリカの独立宣言の東アジアでの伝播についての研究発展可能性

について言及してはいる（ただし彼自身は西洋語以外の史料は扱えず、これらのテーマについてとくに研究を深めているわけではない）。

さてグローバル・ヒストリーは東洋と西洋の垣根を超えるものであるはずである。グローバル・ヒストリーが経済史という分野で先行したのは理由があるだろう。いわば統計や数字などの物質主義な観点から研究しやすいからである。他方、思想史研究の分野ではどうか。コンテクスト主義を貫きながら、西洋の学問の「伝播」や「受容」ではない国際思想史はありえるのか。グローバル・ヒストリーは、そもそも東洋における西洋の「受容」史から脱却を図ることが主眼であったはずである。それが、めぐりめぐって結局西洋の「受容」史に戻ったというのでは、本末転倒ということになる。アーミテイジや山室はそれを回避できているのだろうか。山室の場合は「西学」の受容史というよりは、より正確には「日本由来の西学」の受容史に終始しているのではとの批判が常につきまとう。

「西洋の衝撃」論を排し、「中国内在的」アプローチを提唱したポール・コーエンは近年のグローバル・ヒストリーの盛行が逆に中国を内在的に理解する際の妨げになる可能性があるとして危惧を表明している（*Discovering history in China* 第2版序文）。

東洋と西洋の隘路はそこにある。東洋とは何か、西洋とは何か、そして東洋と西洋はいかに交わるのか。アーミテイジのいう「空間」と山室の「空間アジア」はいかに交わるか。国際的な思想史の真の課題はそこにあると思われる。

本稿は与えられた紙幅と時間の関係で残念ながら論点の提示だけに終わったが、これらの論点は思想史研究の方法論を考えるうえで、今後無視できなくなるであろう。より深い洞察は別稿で論じたい。